

研究ノート

聖エリーザベトのこと

田 中 暁

はじめに

ドイツ中央部に広がるテューリンゲンの森、その森の懐にいだかれるように小都アイゼナハ Eisenach がある。現在の人口51,000。旧東独の町はどこも復興の槌音が鳴り響いているが、アイゼナハも例外ではない。1994年夏、筆者が駅に降りたときには、プラットホームの旧東独時代の廃屋同然のすがたに暗然たる気持ちにおそわれたが、駅舎は修復中で、かわいらしく変身しつつあった。ピンク色で統一した切符売り場など、西側でもお目にかかったことはない。やがて町全体がこごっばりと装いを交えることであろう。

駅から車で10分たらずの小高い丘のうえに古風な城がある。ヴァルトブルク Wartburg である。この地味な、日本人観光客に人気のあるバイエルンのノイシュヴァンシュタイン城などに比べるとほんとうに地味なこの城が、実はドイツ文化史上の数々の重要な出来事の舞台であったことは、わが国ではまだあまり知られていない。おそらくは東側に属していた関係上、簡単に訪れることができなかつたことが、その最大の原因であろう。

ヴァルトブルクが築城されたのは11世紀のことである。もちろん当初は、ほかの城と同じように、その地方の防衛のため、戦のための城として築かれたのであるが、この城を有名にしたのは、なんとといってもそこでくりひろげられた精神上、文化史上の出来事なのである。その主なものを見る

ならば、まずは13世紀のはじめ、パリに留学してフランス文化にも触れたことのある当時の城主ヘルマン方伯は、多くの芸術家をヴァルトブルクに集めた。いわば彼らのパトロンとなったのである。芸術家のなかには、中世ドイツ文学の担い手である騎士たちもいた。騎士であると同時に詩人でもある彼らは、諸国の宮廷を遍歴して歩いた。ヘルマン方伯は気前がよかったので、多くの騎士詩人が集まった。ヴォルフラム・フォン・エシェンバハやヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデなどもその中にいた。こうした状況から「ヴァルトブルクの歌合戦」の伝説が生まれた。リヒャルト・ワーグナーはこれを素材として歌劇『タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦』を書いた。

時代は下って16世紀、ヴァルトブルクはルターの聖書翻訳の舞台となった。1517年10月31日、ルターはヴィテンベルクの城教会の門の扉に贖宥状反対の九十五箇条の提題を公示、すなわち宗教改革の始まりである。1521年4月、ヴォルムスの国会に召喚され、自説の撤回を要求されたが、これを拒否。その帰途、ルターは支持者によって誘拐とみせかけてヴァルトブルクにかくまわれる。城滞在中の1521年12月から翌年2月にかけてのわずか三カ月の間に、ルターは新約聖書をギリシア語原典からドイツ語に翻訳した。3月にルターは城を去るが、後年1534年には旧約聖書をも翻訳。このルターのドイツ語が近代ドイツ語の基になったのである。

次に文豪ゲーテ。1775年11月ゲーテはヴァイマルに入った。『若きウェルテルの悩み』ですでに名を成していたゲーテを、ヴァイマル公国のカール・アウグスト公が招聘したのである。ゲーテはこののち生涯この地に留まることになる。ヴァイマルでのゲーテは国政に参加し、多忙をきわめる生活のなか、息抜きに時折ヴァルトブルクを訪れた。はじめてのヴァルトブルク訪問は1777年のこと、すばらしい四囲の自然のなかで元気を回復したのであった。ヴァイマル初期のゲーテを語るさいに忘れてならないのは、フォン・シュタイン夫人との交際であるが、ゲーテはヴァルトブルクからも夫人に宛て連日手紙を書いている。またゲーテは、ここでいくつかの城

のスケッチも残している。

ブルシェンシャフト *Burschenschaft*(学友会) は、1815年に対ナポレオン解放戦争に参加した学生を中心に結成された。彼らは1817年10月17日から18日にかけて、ヴァルトブルクで一大祝祭を催した。対ナポレオンのライプツィヒ会戦4周年、宗教改革300年を記念したこの大会は、実に460名以上の参加者をあつめて、ここにドイツ統一の大示威運動が行われたのである。

19世紀には城の修復工事が行われ、そのとき描かれたモーリツ・フォン・シュヴァイント *Moritz von Schwind* のフレスコ画は、ヴァルトブルクにまつわる出来事を題材としていて、今日なお訪れる人々の目を楽しませてくれている。

ヴァルトブルクがドイツ文化史上由緒ある地であることは、ここに概観したとおりである。ヴァルトブルクの歴史を辿ることは、すなわちドイツ文化史を管見することであり、この古城の紹介はおおいに意義のあることと言わねばならない。その一端としてここに取り上げるのは、歌合戦の主催者ヘルマン *Hermann* 方伯の子息ルートヴィヒ *Ludwig IV*世の奥方で、ハンガリーから輿入れしたエリーザベト *Elisabeth* の物語である。美しい、非常に美しいエリーザベトは、宮廷の華美をきらい、貧者・病人の救済に身を捧げた。愛する夫の死後、城を追われたエリーザベトはマールブルク *Marburg* に施療院を建てて自分の理想を追求したが、1231年、二十四年間の短く悲しい生涯を閉じた。死後、ローマ教皇により列聖された。筆者は歴史学の専門家ではないので、小論は専門的見地からすれば多くの不備を指摘されることはもとより承知しているが、エリーザベトの生涯は門外漢にも頗る興味深いものがあり、日本ではまだなじみのうすい聖女の紹介をすることにした。

婚 礼

華やかな行列が、夜おそくアイゼナハに到着した。多くの馬車のうちの

ひときわきらびやかな馬車に、ひとりの年端もゆかぬ少女が乗っていた。ヴァルトブルク城主ヘルマン方伯は、みずからその小さな少女に手をかして馬車から降ろしてやった。少女は痩せて、黒い髪、黒い目をしていた。

これはハンガリー王女エリーザベトのヴァルトブルクへの輿入れの一行である。花嫁エリーザベト4歳、花婿ルートヴィヒ11歳、言うまでもなく政略結婚であった。

ヘルマン方伯は中世の詩人たちのパトロンとして有名であるが、政治的には、良く言えば機を見るに敏、悪く言えば風見鶏、有利とみえる方に味方し、巧みに立ち回って今日の地位を築いていた。そのヘルマン方伯が、息子ルートヴィヒの嫁にハンガリー王アンドレアスⅡ世の息女エリーザベトを、いまヴァルトブルクに迎えたのである¹⁾。1211年のことである。

ハンガリー王と結びつくことは、王妃ゲルトルトの実家である南ドイツの名門アンデヒス・メラン家とも縁戚関係となることであり、ヘルマン方伯にとっては自国の運命をも左右する重要事であった。ヘルマンは奮発して、求婚のための立派な使節団をハンガリーに送ったのである。

エリーザベトは1207年生。父君アンドレアスⅡ世が城をかまえる北ハンガリーで幼年期を過ごしたという。わずか4歳で故郷を離れねばならなかったエリーザベトの心中は察するにあまりある。エリーザベトは、方伯夫人ゾフィーとルートヴィヒの妹アグネスの所で育てられた。翌年、5歳になったエリーザベトを不幸が襲う、実母ゲルトルトが死んだのである。エリーザベトは寂寥に堪えながら、日々を信仰のうちに過ごした。

1217年、ヘルマン方伯逝去、ルートヴィヒが後を継ぐ。ルートヴィヒは好ましい若者であった。実直で敬虔な生活態度、君主にふさわしい振舞いの人であって、「敬虔伯」と呼ばれた。彼は美しく、容姿にすぐれ、情け深く、快活で、約束を守り、友情に厚く、決断力があり、気前がよかった。

さて、エリーザベトは一人でいることを好んだ。よく礼拝堂にこもった。敬虔に謙虚に暮らし、派手な宝石や装身具類をきらったが、このことは宮廷の人々には決してよく思われはしなかった。人々はエリーザベトに地位

にふさわしい姿を期待したのである。やがて姑となるゾフィーと義理の妹アグネスも、エリーザベトには不満であった。やがて方伯夫人となる人が世間の前に装身具もつけずに現われるようでは困ると思ったのである。エリーザベトは貧者に対してやさしかった。これも宮廷の人々には気に入らなかった。身分高き女性が、貧者や病人の住むみすぼらしい家を訪ねて施しをするなどということは、前代未聞のことだったからである。エリーザベトをハンガリーに送り返すべしとの声も聞かれた。

しかしルートヴィヒのこころは揺るがず、1221年にルートヴィヒとエリーザベトの婚礼の儀が盛大に執り行われた。

奇 蹟 譚

エリーザベトにも聖人にはつきものの多くの奇蹟譚がある。そのいくつかを紹介する。

エリーザベトの父であるハンガリー国王の使者を迎えたとき、きらびやかな衣装はもう手許にはないはずなのに、方伯夫妻の前にすすみ出た客人たちが見たのは、色あざやかな絹の衣裳をまとい、真珠や金の飾りをつけて、にっこりとほほ笑むエリーザベトの姿であった。どこにその衣裳があったのか、誰にもわからない。

また、義妹アグネスの婚礼がヴァルトブルクで執り行われたとき、城の庭に入って来ていたひとりの男に施しを求められたエリーザベトは、哀れみを禁じ得ず、自らまとっていた絹製のマントを投げ渡した。これは重大なことである。当時若い女性は食事のとき軽いマントを身につけるのがならわしであった。そのマントを人に与えたのである、しかも義妹の婚礼の宴がはじまるというときに。しかしお付きの女がエリーザベトの部屋に行ってみると、マントはそこにかかっていたのである。マントはすぐに食事の広間に届けられ、事なきを得た。あの貧しい男の姿は消えていた。誰もその男を見た者はいなかった。エリーザベトは神に感謝した。あの男はひょっとすると神自身ではなかったのか、エリーザベトの慈悲の心を試さんがた

めに、あのような姿で現われたのではないか²⁾。

エリーザベトにまつわる奇蹟譚の中で最も有名なものは「バラの奇蹟」である。あるときテューリングン地方を飢饉がおそった。人々は雑草や木の根を食べ、馬やろばまで殺して食用にした。パンを食べるなどということは思いもよらぬことであった。多くの人が飢えに死んだ。

エリーザベトの心は痛んだ。彼女は粉を挽かせ、パンを焼かせ、そのパンをふもとの町へ持っていき、人々に分け与えた。施しも沢山した。昼も夜も心の休まるときはなかった。エリーザベトのあまりの気前よさに、城に何もなくなってしまうのではないかと心配する者も出てきた。彼らは方伯に、エリーザベトを諫めてほしいと申し出た。

ある日方伯がアイゼナハの町にいたとき、エリーザベトが城から降りてきた。従うは供の女ひとり。きょうも貧者や病人にたくさんの施しをするのだ。二人はマントの下に、肉、パン、卵が一杯に入ったかごを忍ばせていた。そこへ突然、馬に乗った方伯が現われる。びっくりした二人は声もない。方伯は低い声で言った、

「そなたたち、何を運んでいるのだ。見せなさい」

方伯はエリーザベトのマントを払い、馬上からのぞきこんだ。するとそのとき、あたりに芳香が広がった。かご一杯の食料は美しいバラの花に変わっていたのである。エリーザベトも驚いた。一言も発することができず、ただ夫の顔を見つめるばかり。方伯はいささか後悔して、やさしく話しかけはじめた。そのとき彼は、自分の妻の額の上の方にすばらしい十字架像がまるで冠のように現われたのに気がついた。神懸かりの女房をもった亭主に勝ち目はない、さわらぬ神にたたりなし。方伯はエリーザベトをそのまま行かせた。エリーザベトは心ゆくまで、病人の世話をし、施しを与えた。

このようにエリーザベトにまつわる奇蹟譚は、エリーザベト自身の力で何か超自然的なことが行われるというのではなく、エリーザベトはひたすら敬虔に、慈悲の心のおもむくままに行動し、そのエリーザベトの信仰心を認めた神が奇蹟を起こしていると考えられる。エリーザベトは一途なま

で謙虚に祈った。その謙虚なる祈りが神の心を動かしたのである。

そもそも奇蹟譚とは何であろうか。今日の合理的科学的思考からすれば、荒唐無稽の一顧だにする値打ちのないものと思われるかもしれない。しかし、それは今日の考え方なのであって、中世には中世の考え方があった。エリーザベトに限らず、中世の聖人伝は多くの奇蹟譚を伝えている。「中世では奇蹟は殆ど聖者の本質的資格に属するものであった。寧ろ奇蹟なき聖者伝は存しなかった³⁾。そうして奇蹟を行なうのは、聖人の偉大さなのではなく、神の恩寵によることに注意しなくては行けない。人間が行なうのではない、神の御業なのである。エリーザベトは奇蹟を行なって自分の能力を誇示しているのではない、彼女はただひたすら謙虚に祈ったがゆえに神は恩寵をくだされたのである。奇蹟が魔術と異なる所以である。中世においては聖人が奇蹟を行なうことのほうが、むしろ自然であった、奇蹟によって聖人たることが証明されるとさえみなされた⁴⁾。あらゆるものを因果関係から説明しようとする近代的理性の立場から、中世の奇蹟譚を見てはならない。

アッシジのフランチェスコ

今日ヴァルトブルク城への道を登っていくと、城に着く少し手前に「ロバの駅」がある。文字どおり、ロバが10頭ちかくつながれている。子供たちはロバの背にゆられてあたりを一周することができる。その「ロバの駅」から左に折れて（城から下りて来るときは右）少し行くと、小さな草はらがあり、木でできた十字架が立っている。ここが、1226年エリザベトが施療院を建てた場所である。草はらにはエリーザベトの像もある。草はらのわきには泉がある。今は泉には鉄格子がはめられていて、中は真っ暗でのぞき込んでも何も見えないが、この泉がその昔エリーザベトが水を汲んだ、いわゆる「エリーザベトの泉」なのである。

施療院には三十人ほどの病人が入っていた。いずれも長患いである。彼らが城に登って来ることは到底できないので、エリーザベトが毎日食べ物

を持って降りて行った。病人たちの身体を洗い、着替えをさせ、服を縫った。子供たちは特にかわいがり、おもちゃを与えたりした。

ペストの流行った時期には、死者は棺にも入れず、できるだけ早く埋葬するのが普通であったが、エリーザベトは亜麻布を裁断して、死者をくるんでやり、厳かに埋葬したという。また大飢饉のときには城の蔵を開けて、飢えに苦しむ人々に食料を分け与えた。このような行動はしばしば宮廷生活のしきたりとは矛盾するものであったが、夫ルートヴィヒの理解もあって、方伯夫人でありながら貧者・病人の援助をすることが可能だったのである。

なぜエリーザベトはこのような慈善活動をするようになったのか。それは彼女自身の宗教的素質のみならず、当時の宗教界の動きからも説明されねばなるまい。当時ふたつの大きな清貧運動があった。ひとつはブラバントおよびベルギーの諸都市の女性たちの運動で、これは後にベギン会と呼ばれるようになる。いまひとつは中部イタリア、アッシジ生れのフランチェスコ *der Heilige Franz von Assisi*(1182~1226)の設立したフランシスコ修道会の説く清貧と謙遜の教えである⁵⁾。

このふたつの運動がドイツで出会い、とくに貴族の女性をとらえた。エリーザベトも影響をうけたことは間違いない。1224年から25年頃、最初のフランシスコ修道会士たちがテューリンゲンに現われ、フランチェスコの体験を伝え、清貧の理想を説いた。エリーザベトはアイゼナハに彼らが腰を落ち着けることのできる礼拝堂を与えた。

ルートヴィヒの死

エリーザベトは夫君ルートヴィヒIV世方伯を愛し、方伯もまた夫人をいとおしく思った。方伯の庇護があったればこそ、宮廷内の目は決して好意的ではなかったにもかかわらず、エリーザベトは存分に慈悲の活動に専心することができた。しかし運命は苛酷である。愛する夫と別れなければならない日がやってくる。

中世キリスト教世界はしばしば十字軍を東方に送った。第一回十字軍は、1099年7月16日炎暑のさなかエルサレム城を攻略し、聖地奪回の目的を果たしたが、やがてエルサレムは回教徒の手に奪回され、その後しばしば企てられた遠征はすべて失敗に終わった。失敗の連続の十字軍の歴史のなかで、唯一成果をあげたのが、1228年から29年にかけての皇帝フリードリヒII世率いる遠征であった。皇帝はドイツ兵四万を集め、1227年ブリア地方プリンディシ港から聖地へむけて出発することになる。この十字軍にエリーザベトの夫ルートヴィヒIV世も参加することになったのである。

国の守りを実直な役人たちで固めたルートヴィヒは、テューリンゲンやヘッセンの領主たちともどもいよいよ出発することになる。19世紀の画家モーリッツ・フォン・シュヴィントは出陣の模様をフレスコ画に描いている。出発の合図のラッパが鳴り響き、馬がいなくな中、白地に赤の十字の旗がはためいて、あたりは騒然たる有様。連銭葦毛の愛馬のかたわらで、ルートヴィヒは妻エリーザベトをしっかりと抱きしめ、エリーザベトは夫の頬に口づけしている。苛酷な十字軍遠征のこと、あるいはこれが今生の別れになると予感していたのだろうか。

出発前から疫病の兆しはあったが、やがて船のなかで蔓延、死者の数は数千人、ルートヴィヒもイタリアのオトラントで死去する⁶⁾。すぐさま使者がテューリンゲンに遣わされる。知らせはまず母堂ゾフィーに届いた。ゾフィーは思案に暮れた。いまエリーザベトは身重である。悲しみのどん底に突き落として、母子にもしものことがあってはならない。エリーザベトにはしばらくルートヴィヒの死は伏せておかねばなるまい。ゾフィーは息子たちに箝口令をしいた。こうして方伯の死はしばらくその夫人には隠されたのである。

やがてエリーザベトは女兒を出産、真実を伝えなければならない日がやって来た。ゾフィーはこの悪しき知らせを伝えるのは自分をおいて他にないと思い定めた。息子を失った母たる自分ほど、思いやりの心をもって伝えることのできる者はいないだろうと考えたのである。知らせを聞いたエリー

ザベトがいかにも嘆き悲しんだかは筆舌に尽くしがたい。宮廷は深い悲しみに沈んだ。

方伯が亡くなって、あらためてエリーザベトは自分を保護してくれる人のいないことに気がついた。果たして義弟ハインリヒ・ラスペはエリーザベトを城から追放しようとした。さすがに義母ゾフィーは嫁を不憫に思い、自らハインリヒ・ラスペとかけあった。しかし息子は年老いた母の言葉に耳を傾けはしなかった。エリーザベトは子供たちともども城を追われる身となった。ゾフィーはエリーザベトを腕に抱きしめた。嫁と幼子たちの行く末を考えると、胸がはりさけそうであった。エリーザベトの生涯を物語るビュトナーの筆は、方伯の死後、きわめてやさしい義母ゾフィーを描き出す。義母はもともとエリーザベトに対して好感情をもっていなかったはずなのに、ここへきて、息子を失った悲しみからか、そしてまた年老いたためか、本来の母のあるべき姿に戻っていて、読者としては救われる気がする。実際はどうであったかわからないけれど、我々はビュトナーを信じることにしよう。

1227年冬のある夜、エリーザベトは三人の子供たちと共にヴァルトブルクを去った。再びモーリッツ・フォン・シュヴァイントのフレスコ画を見よう。エリーザベトは生まれたばかりの乳飲み子を左腕に抱き、寒気から守るようにマントにくるんでいる。長女ゾフィーは健気にもひとりで杖をつき、母の先導役を務めている。何も履いていないむき出しの足が痛々しい。長子ヘルマンは、いま去ってきたばかりの城の方を振り返っている。エリーザベトのマントもヘルマンの衣も強い風に翻っている。

城を去ったエリーザベトに対して世間は冷たかった。「エリーザベトは気がふれている」と喧伝したハインリヒ・ラスペに気兼ねしてか、かつて彼女に施しを受けた者も誰も助けくれなかった。エリーザベトを溝に突き落とした乞食女の逸話を数人の研究者が伝えている⁷⁾。それによると、あるときエリーザベトは教会へ行く途中、小路に入った。道は深いぬかるみになっており、道の中に石が置いてあった。その石の上を歩けば足や衣

服が汚れないのである。エリーザベトがその石の上を渡っていると、向こうからひとりの老女がやってきた。以前エリーザベトが施しを受けたことのある女である。しかしこの女はエリーザベトに道を譲ろうとはせず、彼女を下に突き落としたのである。エリーザベトはぬかるみの中にばったりと落ちた。「方伯夫人は施しを与えているときは敬われたが、貧者となつて奉仕するのでは何の意味もないのである」⁸⁾。

コンラート・フォン・マールブルク

さてここでエリーザベトの後半生において深い影響をあたえたコンラート・フォン・マールブルク **Konrad von Marburg** という人物の紹介をしておかなくてはならない。

話は逆のぼるが、1225年コンラートはテューリングンの宮廷にやってきた。フランシスコ会との関係ははっきりしないが、彼はフランチェスコが要求した完全なる清貧ときびしい禁欲とを身につけていた。彼はエリーザベトの理想になかったのであり、このことがエリーザベトをコンラートに近づけたものと思われる。1226年春、エリーザベトはコンラートを聴罪司祭に定め、ルートヴィヒIV世同席のもと、誓願をおこなった。その内容は、コンラートへの服従を誓うことと夫より長く生きた場合の貞操を誓うというものであった。

1227年夫ルートヴィヒは十字軍遠征に斃れ、エリーザベトは城を去る。1227年から28年にかけての冬をエリーザベトが三人の子供たちと数人の忠実な下女たちとともにアイゼナハで過ごしたことは前述したが、このときコンラートはすでにエリーザベトを教皇グレゴリウスIX世の保護下におくべく手を打っていた。1228年2月13日教皇より保護をみとめる書簡が届く、教皇はエリーザベトをコンラートに委ねた。これによりコンラートは宗教上の指導のみならず世俗の事柄に関しても責任をもつこととなった。

コンラートはエリーザベトの寡婦産をとりもどそうとしたが、エリーザベトはそれは望まず、乞食をして歩きたいという意思を表明した。修道院

に入るとか、隠者として生きるといった方伯未亡人にふさわしい生活を考えていたコンラートは、当然のことながらこの希望を斥ける。

こうしてよいよ1228年3月24日聖金曜日の誓願をむかえる。アイゼナハ（一説ではマールブルクに近いヴェールダ）のフランシスコ修道院礼拝堂でコンラートおよびフランシスコ会修道士数名の立ち会いのもと、エリーザベトは祭壇に手をおいて「親類縁者、子供たち、自らの意思、世俗のあらゆる華美、救世主が福音のなかで捨てるように命じているものすべて」⁹⁾を断念したのである。

ここに一つの疑問が生じる。エリーザベトは貧者・病人の世話に身を捧げた、子供たちは特にかわいがった。そのエリーザベトが何故に自分の子供たちを手放したのか？中世では身分高き人々はわが子を自分で育てず、乳母や傅育官に委ねるのが通例であったという事実はあろうが、自ら幼くして実の父母から引き離され、堪えがたい寂寥のうちに育ったエリーザベトが、「自分の子供を他人以上に愛することはない」¹⁰⁾と告白したところに、エリーザベトは血涙をしぼっているのである。この血涙をしぼってこそ、入信の難関は踰えらえる。この世に自分のものはない、わが子もわが子でないところに、ひとは真に神のもとにあるのである。このような例は古来いろいろな形で語られているが、我々はいまエリーザベトにおいてその一つの切実な実例を見るのである。

さて、エリーザベトがその地位にふさわしくない状況におかれているとの噂が広まった。叔母である大修道院長メヒティルト・フォン・キツインゲンが介入する。1228年4月はじめエリーザベトは、叔母によって伯父であるバンベルクの司教エックベルトのもとへ連れていかれる。エックベルトは再婚するようにすすめ、ポテンシュタインの城にエリーザベトを入れた。再婚相手には、なんとフリードリヒ二世の名前まであがったというから、エリーザベトにとっては有難迷惑な話である。貴族の生活にはもどったものの、いっこうに心たのしまぬ日々をおくるエリーザベトを救ったのは、亡き夫ルートヴィヒであった、すなわちルートヴィヒの亡骸がイタリ

アから帰ってくるので、それを迎えるためエリーザベトはテューリンゲンへもどる機会を得たのである。5月はじめ、ルートヴィヒの遺骨埋葬のため、方伯一族は方伯家ゆかりのラインハルツブルンに集合、この機会を逃さずコンラートはルートヴィヒの弟たちとエリーザベトの寡婦産の交渉をおこなった。その結果、エリーザベトに2000マルクが支払われること、マールブルク近郊の土地が終身にわたる用益権（使用し収益することができる権利、したがって財産ではない）として委ねられることが決まった。この土地に施療院が建てられ、エリーザベトはマールブルクへ移ることになったのである。

マールブルク時代

1228年夏、エリーザベトはマールブルクへ移住、1231年に亡くなるまでの三年間をこの地で過ごすことになる。ヴェルナーは言う、「後世エリーザベトにとってはその聖性の名声の基礎をおき、コンラートにとっては仮借なき残酷な宗教的指導者との評判の基礎をおいたのは、このマールブルクの三年間である」¹¹⁾。

遅くとも1228年冬のはじめには施療院はその活動を開始できたであろうと、ヴェルナーは推測している。コンラートが院長、エリーザベトは施療院で働く女性たちの頭であったが、他の女性たちと同じ仕事、いやむしろ一番つらい仕事をした。コンラートは細かなことにいたるまでエリーザベトの生活に介入し、自分の意思を押しつけるようになった。エリーザベトにはイーゼントゥルット **Isentrud** とグーダ **Guda** という永年仕えてきた女官がいたが、コンラートはこのふたりを遠ざける。そのかわりに助修士と低い身分の若い女性と身分の高い未亡人の三人をエリーザベトのそばに置いた。助修士はエリーザベトの用事をし、信心深い若い女性によってエリーザベトの謙虚さが増し、耳が聞こえず陰険な未亡人によって忍耐力がきたえられるというのがコンラートの言い分であったが、コンラートの死後発表されたイーゼントゥルットの報告によれば、自分のかわりにやって

きた女性たちはみな陰険であったという。エリーザベトが禁を破って貧者に施しをするとすぐにコンラートに告げられ、その結果エリーザベトは罰として打擲された。

イーゼントゥルートは書いている、「コンラートはさまざまなやり方でエリーザベトが毅然たる態度をとることができるか試した。彼女が望むことと正反対のことを命令して、彼女の意思をくじこうとした。それから、彼女が信頼を寄せている人をだんだんと回りから遠ざけていった。ついには私を放逐した。最後に、私の同僚でエリーザベトが子供のときから一緒に生活したグーダを引き離した」¹²⁾。エリーザベトはもはや方伯夫人ではない、コンラートのもつて施療院に働く一介の看護人である、エリーザベトの立場が以前と大きく変化したことは事実である、このことをコンラートははっきりと意識させようとしたのであろう。

イーゼントゥルートとグーダはエリーザベトの女官であり、コンラートがエリーザベトに加えた侮辱について報告しているが、施療院でエリーザベトとともに看護人として働いていた二人の女性も、エリーザベトについて発言している。二人の名はエリーザベト（方伯夫人と同名）とイルムガルト Irmgard である。二人はエリーザベトがコンラートを非常に恐れていたことを伝えている、ただしそれは神に対する恐れと同じものであった。イルムガルトの報告にはアルテンベルク修道院での出来事が出てくる。エリーザベトは服従の誓いを破ったと誤解されて鞭で打たれた、その傷は三週間消えないほどであった。ここでエリーザベトの有名な言葉が紹介されている、「私たちはこのようなことはよろこんで耐えなければなりません。私たちは川のなかで成長する葦のようなものなのです。川の水嵩が増すと、葦は押しつぶされて倒れます。しかし、水は上を流れていって、葦は折れることはありません。水が引くと、葦はまた起き上がって、力いっぱい朗らかに美しく成長するのです。そのように私たちも、ときとして身をかがめて低くなり、そのあと陽気に美しく起き上がらなければなりません」。エリーザベトは忍耐のもたらす成果をよく知っていたのである¹³⁾。

エリーザベトは貧者や病人に対して献身的に尽くした。癩病の少女や疥癬に苦しむ少年をみずから介護した。病人の汚れたシーツを洗濯することでもした。「病人と貧者の母」という言葉は中世以来エリーザベトの代名詞となっている。施療院で働く身分の低い仲間とも心のこもったつきあいをした。また、施療院では生計を得るために羊毛を紡ぐ仕事が行なわれていたが、エリーザベトも率先してこの仕事をした。ためにハンガリーからやってきた使者は、エリーザベトが身分に合わないことをしていると憤慨したほどであった。

コンラートはエリーザベトの病人、貧者への献身に制限を設けようとする。病気に感染するのを恐れたからであり、自分の食べ物を切りつめて貧者に施すので体力も消耗するからである。また施療院維持のためにも高額な施しをすることは慎んでもらわなければならなかった。この点でエリーザベトはコンラートの禁止を守ろうとしなかった。ふたりの間には深い相剋、葛藤があった。

この間コンラートは、修道院等で修道会の規則が守られているかを検査する巡察師と異端審問官に任命されていた。異端を追及するに峻厳苛烈、多分にファナーティシユな面もあったコンラートは、エリーザベトに対しても仮借なき厳しさでのぞんだ。

エリーザベトのマールブルク滞在は三年で終わった。この間の労苦と緊張が彼女の力を奪っていた。1231年11月17日、24歳の若さでエリーザベトは死去した。二日後、施療院の礼拝堂で葬儀が営まれた。

列 聖

1232年春、コンラートはエリーザベトを聖人に列するための手続きを開始した。しかし彼はその結果を見ることなくこの世を去る、殺されたのである。冷酷非情な異端審問官としてコンラートは悪名高かった。多くの人々を死に至らしめた。貴族であっても薪の山で火刑に処することを恐れなかった。1233年7月30日彼は襲われた、路上で犬のように打ち殺されたという。

コンラートの死後、エリーザベトの義弟コンラート・フォン・テューリ
ンゲンが列聖の手続きをすすめた。1234年、彼はドイツ騎士団に入り、施
療院はドイツ騎士団の手に渡った。ドイツ騎士団長ヘルマン・フォン・ザ
ルツァは皇帝フリードリヒⅡ世と懇意であり、また教皇の信望も厚かった
ので、列聖をすすめるには好都合であった。こうして1235年5月27日聖霊
降臨祭にエリーザベトは、グレゴリウスⅨ世により列聖された。

エリーザベトの墓所で、埋葬の翌日、四十年ものあいだ精神を病んでい
たひとりの僧が快癒した。彼女の墓所は、奇蹟を求める巡礼者たちの聖地
になった。墓所の上に教会が建てられた、ドイツで最も美しいゴシック教
会の一つとされるエリーザベト教会である。1235年着工、1283年落成、14
世紀半ばには双塔も完成した。

エリーザベトはやさしく慈愛にみちた聖女であった。しかしこの聖女は
なかなか気丈で、自分の意思を貫く頑固な一面ももっていたように思われ
る。清楚で強情な聖女、誰かエリーザベトを主人公に物語を書かないであ
ろうか¹⁴⁾。

参 考 文 献

本文中にはいちいち明示していないが、小論執筆にあたっては以下にあげ
る文献の恩恵を受けた。

Asche, Sigfried: Die Wartburg. Leipzig, 1955.

Asche, Sigfried: Die Wartburg. Geschichte und Gestalt. Berlin, 1962.

Büttner, Karlheinz(Hrsg.): Der Sängerkrieg auf der Wartburg. Wart-
burg-Sagen. Marburg, 1992.

Dellingshausen, Erica von: Die Wartburg. Ein Ort geistesgeschichtli-
cher Entwicklungen. Stuttgart, 1983.

Hoppe, Günther: Elisabeth. Landgräfin von Thüringen. Jena, 3.verb.
Auf., 1991.

- Jürgenmeier, Friedhelm (Hrsg.): So also, Herr... Elisabeth von Thüringen 1207-1231. Frankfurt/M., 1982.
- Leppin, Eberhard: Die Elisabethkirche in Marburg an der Lahn. Königstein i.T., 1989.
- Müller, Rüdiger: Soviel Liebe fasst ein Leben. Elisabeth von Thüringen. Freiburg/Basel/Wien, 1993.
- Noth, Werner/Beyer, Klaus G.: Die Wartburg. Denkmal/Museum/Sammlung. Leipzig, 1990.
- Ohler, Norbert: Elisabeth von Thüringen. Fürstin im Dienst der Niedrigsten. Göttingen/Zürich, 2.verb. Aufl., 1992.
- Wartburg-Stiftung (Hrsg.): Wartburg. Porträt einer Tausendjährigen. Eisenach, 1993.
- Wies, Ernst W.: Elisabeth von Thüringen. Die Provokation der Heiligkeit. Esslingen/München, 1993.
- Werner, Matthias: Die heilige Elisabeth und Konrad von Marburg. In: Sankt Elisabeth. Fürstin, Dienerin, Heilige. Aufsätze, Dokumentation, Katalog. Hg.v. der Philipps-Universität Marburg in Verbindung mit dem Hessischen Landsamt für geschichtliche Landeskunde. Sigmaringen, 1981. S.45-69.
- ヨアヒム・ブムケ／平尾浩三他訳『中世の騎士文化』白水社、1995年。
- ハインリヒ・プレティヒャ／平尾浩三訳『中世への旅 騎士と城』白水社、1989年。
- 岸谷敞子・柳井尚子『ワルトブルクの歌合戦 伝説資料とその訳注』大学書林、1987年。
- 坂井栄八郎『ドイツ歴史の旅』朝日新聞社、1986年。
- 下村寅太郎『アッシシの聖フランシス』南窓社、昭和51年。
- 下村由一編『ヴァルトブルクの文化史』（教科書版）朝日出版社、昭和45年。
- 橋口倫介『十字軍』教育社、1996年。

藤沢道郎『物語 イタリアの歴史 解体から統一まで』中公新書、1994年。

註

- 1) これについては異説もある。それによると、エリーザベトの婚約者ははじめヘルマン方伯の息子ヘルマン（父親と同名）であったが、エリーザベトが9歳のとき亡くなった。そこでエリーザベトをハンガリーに送り返せという意見もあったが、結局、弟ルートヴィヒと結婚することになったという。Noth, S.24f. および Hoppe, S.28 参照。
- 2) Büttner, S.36.
- 3) 下村寅太郎、42頁。
- 4) 同上、43頁参照。
- 5) フランチェスコについては藤沢道郎『物語 イタリアの歴史』53-78頁に詳しい。名文名著である。また後出のフリードリヒII世のことも同書参照。
- 6) Rüdiger Müller では、ルートヴィヒは十字軍遠征者が船に乗り込むプリンディシで疫病のため死んだとされている。そうしてゾフィーにもたらされた方伯死去の知らせは、すぐにエリーザベトに伝えられた。25頁。
- 7) Büttner, S.56/Asche, S.35/Müller, S.26/Ohler, S.57f.
- 8) Asche, S.35.
- 9) コンラートの言、Werner, S.54 による。
- 10) Wies, S.147 による。なお、エリーザベトの長子ヘルマンはその後ヴァルトブルクで養育されたが、18歳で死亡した。
- 11) Werner, S.56.
- 12) Werner, S.58 による。
- 13) Werner, S.58f.
- 14) 作曲家フランツ・リストにオラトリオ『聖エリーザベトの物語』がある。なお、エリーザベトの生涯に心理学的精神分析的見地から解釈をほどこし、議論を巻き起こした Elisabeth Busse-Wilson の評価の高い論

文“Das Leben der Heiligen Elisabeth von Thüringen — Das Abbild einer mittelalterlichen Seele”, München, 1931 は、小論執筆時点で入手できていない。

附記 本稿は「ヴァルトブルクの文化史」研究の準備作業の一つである。

Die heilige Elisabeth von Thüringen

Satoru TANAKA

Auf der Wartburg bei Eisenach sind verschiedene kulturgeschichtlich wichtige Ereignisse geschehen. Die Burg wurde in der zweiten Hälfte des 11. Jahrhunderts gegründet, im 13. Jh. kamen viele Künstler, angezogen vom Mäzenatentum des Landgrafen Hermann, auf die Burg; damals entstand die Sage des "Sängerkriegs". Während seines Aufenthaltes auf der Burg 1521/22 beschäftigte sich Martin Luther mit der Übersetzung des Neuen Testaments ins Deutsche. Goethe verweilte 1777 zum erstenmal auf der Wartburg und genoß ihre herrliche Umgebung. Auch später besuchte er manchmal die alte Burg. Im Jahr 1817 schließlich wurde das Festspiel der Burschenschaft auf der Burg veranstaltet, an dem 460 patriotische deutsche Studenten teilnahmen. Diese bemerkenswerte Burg ist uns Japanern aber noch ziemlich unbekannt, und so lohnt es sich auch heute noch in unserem Land, Kulturgeschichtliches aus dem Umkreis der Wartburg vorzustellen.

In der vorliegenden Arbeit wird das Leben der heiligen Elisabeth dargestellt. Elisabeth wurde in Ungarn geboren, zog aber als vierjähriges Mädchen nach Eisenach, um Ludwig IV., Sohn des Landgrafen Hermann, zu heiraten. Sie gab gern Armen Almosen, pflegte Kranke und lebte in Demut und Frömmigkeit. Nach dem Tod ihres Mannes wurde sie aus der Burg vertrieben und verweilte die letzten drei Jahre ihres Lebens in einem Hospital in Marburg, in dem sie sich unter der Leitung ihres strengen Beichtvaters Konrad von Marburg Armen und Kranken widmete. Sie verzichtete auf alles, "was der Erlöser im Evangelium zu verlassen rät", auch auf ihre Kinder. Am 17. November

1231 starb sie mit 24 Jahren. 1235 wurde sie heiliggesprochen.

Die heilige Elisabeth, die sehr barm- und mildherzig und im Streben nach der Erfüllung ihres Ideals sehr tapfer war, verdient unser großes Interesse.